



2009年(平成21年)
7月号(No. 770)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

日本の山岳写真に関わって47年	
安曇野市で寄贈作品展開催	1
「森づくり問題」執行部の見解	4
2年の任期を終えて、いま思うこと	5
映画『劔岳 点の記』関連の	
書籍がおもしろい	6
東西南北	8
戦時下に結成された「日本女子登山会」	
ドイツアルプス紀行	
吹雪の山の湯で	
活動報告	10
山研運営委員会／科学委員会／	
三水会	
図書紹介	12
支部だより	14
秋田支部	
会務報告	15
ルーム日誌	17
会員異動	17
新入会員	17
INFORMATION	18
図書受入報告	18
博物館訪問	19
立山カルデラ砂防博物館	

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10～20時
水・金 13～20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10～18時
夏季休室 8月8日～8月16日

日本の山岳写真に関わって47年 安曇野市で寄贈作品展開催

杉本 誠

日本の山岳写真の歴史を刻んだモノクロ写真約120点が、この夏、長野県安曇野市の豊科近代美術館で公開されている。すべてが日本の登山史を物語る貴重な資料である。寄贈した愛知県豊田市の杉本誠会員に、山岳写真収集と寄贈の経緯を綴ってもらった。

47年前、1962年の初秋、私はわずかな時間をみつけては、当時、御茶ノ水にあった日本山岳会のルームに通っていた。会員ではないが、『岳人』編集部員の名刺で許された。目的は年報『山岳』を創刊号から読むことだった。

7月まで中日新聞編集局社会部に在籍していたが、8月になって出版局編集部へ転属となり、山の

専門誌記者としての第一歩をここから踏み出そうと思ったのである。当時の取材ノートには小島鳥水、志村鳥嶺、高野鷹蔵、辻村伊助など各氏の名前が並んでいる。ルームの帰りは神保町へ回り、まずは山岳書の多い悠久堂へ寄った。『山岳』で覚えたばかりの著者の本があると電車賃だけ残して買えるだけ買った。よく金がつづい

たと思うが、幸い週刊誌を主に社外原稿の依頼が絶えずあったので、給料に食い込むことはなかった。余談になるが悠久堂の棚の上段にほこりにまみれて積み重ねてあった『信濃博物学雑誌』は、後に

どれほど役に立ったことか。また、名古屋本社に転勤になってから、古書探しに苦労しなくて済んだのも、この時の蓄積のおかげである。話を本題に戻す。こうして得た基礎知識をもとに10月ごろから取材に入り、書き始めたのが『岳人』

1963年1月号からの連載「日本山岳写真史ノート」である。今から考えれば随分無謀な怖いもの知らずだったと思うが、それが若さというものか。

連載の反響は予想外に早かった。1月号発売の当日12月14日のこと

である。電話で「武田だが」には驚きを超えて呆然となった。靖国神社の境内を横切り、富士見町の武田久吉邸を訪れると、磨きこま



北ア・白馬岳のお花畑周辺を登る女性たち。1916年、河野齡蔵撮影

れた式台のある昔ながらの日本家屋である。恐る恐るでろくにあいさつもできない私に、「間違いいあるがいい企画になるよ。日本山岳写真史を仕上げなさい」と励ましの言葉をいただいた。私が47年間つづける土台となったのは、武田先生のこの言葉である。

原板の発見に全力を注ぐ

最初の日本山岳写真史ノートは文字通りノートであり、志村烏嶺から田淵行男まで1年間、12回書いたものの、その時点で得た材料をまとめたに過ぎず当の筆者自身にも不満が残った。そこで『岳人』を離れ、東京から名古屋に転勤してからも休日を利用して取材をつづけ、ある程度の資料がそろったところで、1980年1月号から「続・日本山岳写真史」を書き出し、25回に及んで終わった。『岳人』での2度の連載を基に書き改め、ようやく、『山の写真と写真家たち』(講談社刊)と題して1冊にまとめたのは1985年のことだ。スタートから23年が経っている。この間、私が最優先したのは原板の発見である。原板といっても初期にフィルムはなく、ガラス乾



後立山縦走記念写真。辻本満丸撮影

板だった。キャビネサイズのガラス板に極めて薄く感光材が塗ってあり、これを1枚ずつ組立暗箱写真機に挿入して撮影した。足場の悪い山の中では、1枚に30分くらいかかったともいう。原板は何よりも大切な山岳写真史の基礎資料である。粗雑に扱えば割れ、強くこすれば感光膜のはがれる原板を宝物のように抱えて、神田の写真弘社に持ち運ぶのは私の最も緊張する時間であった。

写真弘社では柳澤卓司氏がいつも応対され私の意図を聞いたうえ、

美術館や博物館に同社が納める仕様で仕上げるのが決まった。

印画作成の次にくるのが解説書きである。写真を持ち、借用した原板を返却しながら再度、ご遺族宅を訪れ、アルバム、山日記類などが残っていないかお尋ねした。間に関東大震災や第二次世界大戦があつて、これはかなり困難なお願ひであつたが、幸いに2度の訪問でどなたも意図を了解されて協力が得られた。八方手を尽くしても分からず1枚の解説を書くのに10年くらいかかったこともあつた。見当をつけて写真を現地の役所などに送って、調べていただいたことも何度かある。

解説書きで驚喜したのは、辻本満丸氏撮影の「後立山縦走記念写真」である。写真の中央に見える白い布に墨で文字が書かれていて、拡大コピーすると、同行者名が列記してある。写真は隅から隅までルーペで見るくらいの注意深さが必要だと教えられた。この写真を手に訪れた三枝威之介氏(写真左)からは、当時の模様、特にご本人の持つピッケルと隣に立つ中村清太郎氏のピッケルの相違などの話を聞くことができた。

辻村伊助作品の密着プリント

長い原板探しのなかで、エピソードとして、ただちに思い出すのは、辻村伊助氏である。かの『スウィス日記』や『ハイランド』の著者。流麗な名文とともに、その優れた感性は写真にも表われ、写真集『高山深谷』の第6集は辻村氏のヨーロッパ滞在中の作品のみで占められ、日本の山は第7集に入っている。

印画はこの2集で見られても原板は関東大震災で消失したと思われていた。それがあつたのである。武田久吉氏が自著用に借りておられたため、奇跡的に20余枚のキャ



「樹」。明治末年、辻村伊助撮影

ビネ乾板が助かった。私は武田氏の許可を得て、ただちに密着焼きにした。しかし、引き伸ばしをする機会がなく、安曇野市へは行っていない。

今年6月に封切られた映画『剣岳 点の記』に関係のある写真だが、石崎光瑠氏の「剣岳登頂の記念写真」は1909年7月24日撮影で、中央には陸地測量部によって建てられた三角測量の標識が写っている。民間人としては、これが初登頂となった。

をなされた光瑠氏の京都のお宅にあった。ご遺族の方が「もしやこれでは」と出された箱に入っており書棚の本の間に納められていた。「大切にしていたのでしょう」とのお言葉を重く受け止めて帰った。松本の河野齡蔵氏の場合もそうだが、どのお宅でも原板は大切にしておいた。もう使うことはないにしても、父もしくは祖父が丁寧に扱っていた記憶は伝えられており、書棚、中2階などに、ひっそりと置かれていて、それが結果的に湿気を呼ばずにすんだのである。



石崎光瑠らは宇治長次郎らの案内で剣岳に初登頂した。1909年、石崎光瑠撮影

イタリアと日本に1組ずつ

私がこのようにして、原板集めをし、プリントに仕上げているのに着目し、最初に総合的な写真展を企画したのは、イタリア国立トリノ山岳博物館のアルド・アウデイーゾイオ館長である。前記の著書を見たうえ、来日を機会に拙宅を訪れ、全作品を見てイタリア展を決められた。

その際、写真展終了後、館のコレクションにしたいと申し出があり、これには困った。返却した原板を再度借用する必要が生じたの

である。大仕事になったが、これを好機ととらえて、イタリア用、日本用の2組を作ることにした。

ここで、なぜ寄贈先が安曇野市かとの質問に答えるとすると、館の「場」の問題がある。イタリア山岳博物館の屋上に上がるとヨーロッパアルプスが文字通り視野いっぱい広がる。日本に置き換えると安曇野ではないか。すでにここには田淵行男記念館という核がある。

とはいうものの、私の収集した作品は私個人のものではない。必要経費を負担しているとはいえ、



枯木が林立する冬の大正池と焼岳、穂苅三寿雄撮影

私のなかには「お預かりしているもの」の感覚が絶えずあった。まづご遺族、何人かの現役写真家の了解を得ることを先決問題として、ほぼ3年間の準備期間を経て、安曇野市に寄贈が決まった。

同市では、主要作品、関連資料など寄贈537点のなかから約120点を選び、豊科近代美術館を会場に特別展が開催される。会期は7月18日から8月23日までである。私は、ようやく肩の荷を下ろした安堵感にひたつて、ゆっくり会場を回りたいと思う。

マニフェスト

「森づくり問題」執行部の見解

常務理事 成川隆顕

会報4月号に掲載した『高尾の森づくりの会』運営正常化で確認書』の続報である。「高尾の森づくりの会」をはじめ各支部で展開されている「森づくり」活動に対する執行部(本部)の考えを説明したい。

まず高尾の森づくりの会の問題について——。4月号の記事は宮下前会長が正常化に向けて『順守・改善指示』を出したのに対し、高尾の森づくりの会から、自然保護委員会の所管のもとに活動することを確認する内容の回答書がきたという段階のもので、問題解決に向けてスタートしたばかりの時期だった。それから2カ月、不正常な事態を正すため、いま常務理事会のレベルで具体的な詰め作業を急いでいるところである。

宮下前会長が『順守・改善指示』の中でもっとも重視したのは「高尾の森づくりの会の活動は、社団法人日本山岳会自然保護委員会の管轄のもとに行なわれるものであり、会の規約・会計及び全ての外

部団体・外部関係者と交わす契約・協定などの取り決めは自然保護委員会に報告し理事会の承認をうける」という項目である。

そして同会に対し、改定された規約の提出、森林管理署と交わした協定書などの提出を求めたほか、自然保護委員会との事務連絡が途絶えた結果、滞っている過去2年分の「年次活動報告」「同会計報告」「助成金、補助金、寄付金についての報告」「安全計画」「事故報告」などの報告事項について、提出義務を履行するよう求めた。

このうち「規約改定」については当初の「財団法人日本山岳会自然保護委員会 高尾の森づくりの会」という名称から「自然保護委員会」を外す変更が、昨年5月、森づくりの会の一存でなされ、さらに、それ以前から改定名称が外部との協定文書にも使われている問題が指摘された。名称変更は組織上、自然保護委員会(理事会)に相談し、報告・承認を求めるのが運営上の約束事で、明らかにル

ール違反であった。

会長の『順守・改善指示』に対し高尾の森づくりの会からは、遺憾の意とともに今後の運営に当たって自然保護委員会(当面は常務理事会)と連絡を密にし、過去にさかのぼって、必要な報告をすることが確約された。

その後の作業で、滞っていた経理関係ほかの書類も提出され、正常化へ向けて事務的な処理は8割方終えている。名称変更問題については、外部との協定が絡んでおり、処理方法を常務理事会で協議して理事会に諮りたいと思う。

高尾の森づくりの会の会員は現在、日本山岳会の会員が70人、一般のボランティア会員が150人、それに協賛企業や団体も加わって日本山岳会のなかでは最も大きな事業集団であり、当山岳会々員以外の意向も容れながら運営するという側面がある。

来年で10年目を迎えるが、人数からいって一般会員の方が多いこの活動グループを、これまでどおり本部自然保護委員会の所管とするか、別の位置づけをしたほうがよいのか——。会の規模、メンバー構成などから、自然保護委員会

の所管から切り離すという案も選択肢のひとつとしてあがっている。いずれにせよ、正常化を見届けたところで組織上の位置づけを再検討したいというのが、尾上会長、藤本副会長(自然保護委員会担当理事)の意向である。

一方、「猿投の森づくりの会」(東海支部)や「権現の森づくりの会」(岐阜支部)をはじめ各支部に広がっている「森づくり」はどうか。これについて執行部の考えは、各支部の自主性に委ねるべきだということと一致している。それぞれの事情が支部によって異なっている。運営に本部が口を挟むことは避け、支部によってコントロールされることが望ましいからである。ただしすべての森づくりに共通する一定の指針、枠組は必要で、本部としても最小限の守るべきルールを設けたい。支部長会などにもお諮りすることになるが、骨子としては、①森づくり活動の目的、②運営に当たっての報告・承認事項、③安全最優先の確認、④公明・公正な運営、などの順守事項を簡潔に示す内容となろう。当会の目的を逸脱する営利活動の禁止は当然盛り込みたい。

ルック・バック

2年の任期を終えて、いま想うこと

宮下 秀樹

2年前に会長の大役を引き受けたとき、山岳会をこうした方向に持っていきたいという明確な抱負があったわけではない。せめて任期中は「楽しいクラブライフ」を充実させるための環境づくりを念頭におき、自分なりに精いっぱい務めて次へ繋ごうというのが、私の正直な気持ちだった。

しかし、就任前から分かっていたことだが、わが日本山岳会には、新しい法人制度という、会の存続にかかわるような難問が外から降りかかっていた。そして内にもさまざまな課題や問題点を抱え、的確ですばやい対応を求められていた。いま、2年前と状況は余り変わっていない。それが分かっているだけに、ここで身を引くことにいささかの思いは残る。しかし山岳会のこれからの考えると、先頭に立つものが若返らないと展望は開けない。ジリ貧状態は打開できない。去年の夏ごろから、その思いが強くなった。だれに会の再生と活性化を託すのがよいか、思い

悩んだ。周囲から、若返りに道を拓いたのは大英断だと言ってくれる人がある。省みて、在任中の2年間、私は組織としての山岳会を維持し次の展開への道を探ろうと心がけた。しかし、足固めの途中ともいえる段階で、パワー不足を痛感したことも事実である。

決して一時の思いつきで尾上さん考えたわけではない。全国でもっとも元氣のある東海支部を育てたそのパワーと指導力、企業経営を含む経験と活力に賭けてみようと思ったのだ。当然のことながら会長一人若返ってもパワーにならないので、極力若い理事を配することに腐心した。

私が会長に就任する前後のJACは、百年の節目を無事乗り越え、次の百年に向けて目標を模索中だったと思う。あらためてJACの歴史と伝統を噛みしめ、引き継ぎ事項を整理選択し、取り巻く環境に目を凝らして任の重さに身を引き締めた。

少子高齢化の波が打ち寄せてい

た。会員構成に合わせた運営と、若者にも魅力のある会作りの実現が課題と考えた。十数年前、当時の山田二郎会長は「日本山岳会はアルパインクラブであるという原点に立ち、運営してきた」と明言した。しかしそれからの年月、わがJACの高齢化は年を重ねるごとに進み、新入会員も50歳、60歳台から登山に関心をもつようになった人が多くなった。

かつてJACによって代表された「パイオニアワークとしての登山」への関心は、若者たちの心から薄れていった。時代は移り変わり、社会的評価の視野から遠のいていった。きわめて少数の先鋭クライマーが光芒を放つ一方で、岩や人工壁を登ること自体を目的としたフリークライミングが一部若者の心を捉えているのが現状だ。

高齢化に歯止めがかからないとすれば、高齢者パワーをどう活かすかが知恵の絞りどころであろう。東海支部の活力の源泉も、この高齢者パワーにあるのではないかと思つた。

最近になってますます、活動の原点が支部活動にあることがはっきりしてきた。顔を突き合わせて

計画を練り、汗を流しながら山を楽しむ。時には海外へも出かけて行く。仲間と力を合わせ、地域にも何らかの形で貢献できるのが支部活動である。

百周年記念事業のなかで特筆された「中央分水嶺踏査」は支部の活性化に大きく貢献した。そして全国各地の会員が目標を共有することでJACとしての一体感をもち、結束を強める結果につながったと思う。そのパワーを、今後の「山の日プロジェクト」につなげてほしい。

残された課題として、ざっと2000人の会員を擁する首都圏の支部化促進がある。2年前にスタートした栃木、茨城、千葉支部の熱心な活動に元気づけられる一方で、肝心の3都県では多摩地区でわずかに動きがあるだけで設立には踏み込まず、新執行部に先送りすることになってしまった。

ご支援ご指導を賜った先輩各位と、ご協力をいただいた会員の皆さんに感謝している。幸いこの2年間、苦勞をともにした神崎、宮崎、成川さんたちが残っているの

カルチャー

映画『劔岳 点の記』関連の書籍がおもしろい

三好まき子

現在、全国で映画『劔岳 点の記』が公開中だが、それにとともに、映画に関連した本が出版されている。その中から4冊を紹介したい。

『劔岳 点の記 オフィシャルガイドブック』



2009年5月
扶桑社刊
B5判 89頁
定価 1680円

映画を見ていて、ストーリーや登場人物の関係が、中盤までわからない場合がある。「あれはどういうことだったのだろう」と、最後まで疑問が残ることもある。そんな時にガイドブックが役にたつ。

この映画『劔岳 点の記』は、ストーリー自体は難しくないのだが、山岳のことや地図のこと、時代背景など、中身が盛りだくさんだから、見終わってから読めば、よりいっそう理解が深まる。とくに山

に興味のない一般の人にはなおさらだろう。

映画の印象的な場面を切りとったグラビアページが多いが、「小島鳥水と立山山岳会の100年」「立山信仰と立山曼荼羅の世界」「測量が分かれると映画がこんなに面白くなる」などの読み物のページでは、この映画の背景がわかりやすく説明されている。ただ、一般の映画好きに向けて書かれているため、山岳への興味として映画を見る人には物足りないかもしれない。

監督や俳優へのインタビューや撮影スタッフの紹介、そして「プロダクションノート」や「メイキング」とよばれるページが充実しているのは、映画のガイドブックならではのであろう。役者やスタッフ、初めて体験する過酷な山の撮影現場で、体を張って映画を作りあげていく様子は、まるで山岳部の合宿のようで、そんな舞台裏を楽しむながら読むのもよいかもしれない。

『もうひとつの劔岳 点の記』



山と溪谷社・編
2009年7月
山と溪谷社刊
A5判 192頁
定価 2100円

さて、「一般向けの映画のガイドブックでは物足りない。もう少し時代背景や当時の山岳事情、そして劔岳のことを詳しく知りたい」ところで、映画は事実なの？という人にお勧めしたいのが『もうひとつの劔岳 点の記』。

そもそも劔岳が、小説や映画のテーマとして取り上げられたのは、初登頂にまつわるさまざまな「謎」が人々を魅了しているからだ。1907(明治40)年に、陸地測量部の柴崎芳太郎が率いる測量隊が、人跡未踏といわれていた劔岳の頂上に到達したところ、奈良時代末から平安時代のものと思われる錫杖の頭と鉄剣が残されていたことからすべてが始まる。

「その錫杖の頭と鉄剣はいつ、誰が置いたものか?」「柴崎隊とあるが、登頂したのは誰か?」「同行したガイドは?」など、初登頂にまつわる「謎」からいくつもの「物語」が生まれ、山そのものの魅力

と相まって人々を惹きつけるのだ。

本書では、映画の紹介は第一章「映画『劔岳 点の記』の魅力」にとどめ、第二章「原作『劔岳 点の記』から生まれたもの」で、新田文学における「史実」と「小説」の関係にふれている。そして続く第三章「測量登山と『点の記』」と第四章「登山史の中の劔岳」で、山岳史、測量、そして宗教的側面からアプローチし、初登頂の「謎」に迫る。もちろん、映画を見ている人にも、読みごたえのある充実した内容で、劔岳という山の魅力を多面的に解き明かしてくれる。ちなみに、映画と原作が描く小島鳥水と柴崎芳太郎のシチュエーションは完全にフィクションである。第五章は、劔岳への登山コースや周辺の情報を網羅したガイドページ。この夏の劔岳周辺は混雑するかもしれない。

『森下恭写真集 劔岳』



森下 恭・写真
2009年7月
山と溪谷社刊
A4変型判 80頁
定価 2625円

山と溪谷社からはもう1冊、写



『森下恭写真集 剣岳』から

真集が出版された。タイトルはそのものずばり『剣岳』。

剣岳の写真といえば、おなじみの別山からの姿や仙人池からの裏剣を思い描く。ところがこの写真集には、そういう写真がいつさい登場しない。この作者はかたくなといえるほど、「秋から冬」の「剣岳の岩」だけを撮り続け、モノクロ写真にこだわる。

雪を寄せつけないチンネの岩肌と、ヒマラヤ巔に覆われた八ツ峰は、同じ岩と雪だとは思えない質感をもつ。黒と白に切り分けられた、直線はあくまで直線で、曲線もあくまで曲線。その頑固さが作

者に伝染したかのようだ。

作者は「チンネは天を突くように屹立している。刃だと思つた」と、あとがきで綴る。その直感が、

巻末の地質学的な考察「剣岳の成り立ち」で裏づけられている。剣岳の稜線部は細粒緻密な閃緑岩、周囲は焼き入れされて岩石が緻密に変化した毛勝岳花崗岩から成り立ち、「刃先を超硬合金で、刀身を焼き入れした鋼で作った、最強の刀である」という。

その剣岳の本質が、小泉弘さんのブックデザインに見事に表現されている。本のカバーを外してみよう。鈍く輝くシルバークレーの剣岳の岩肌が現われる。

『剣岳に三角点を！——明治の測量官から昭和・平成の測量官へ』



山田 明・著
2007年10月
桂書房刊
B6判 222頁
定価 1575円

さて、意外なことに5年前まで、剣岳には三角点がなかった。その三角点を設置しようと奔走し、実現させた国土地理院の元測量官が2年前に著わした『剣岳に三角点

を！』を紹介したい。

そもそも「点の記」とは、三角

点の戸籍にあたるという。だから、剣岳の「点の記」は、2004年8月24日に三等三角点が設置されて、初めて作成されたことになる。

その日、地元富山の学生ら55人が、重さ63キの標石をリレーで背負い、剣岳の頂上に三角点が設置された。そして作成された「点の記」には「選定・明治40年7月13日」「選定者・柴崎芳太郎」が記されたという。「明治の測量官から昭和・平成の測量官へ」というサブタイトルに、著者の測量官としての心意気を感じられる。

版元である富山の桂書房は、地域に根ざした良心的な本を出版していることで定評があり、本年1月には、出版社に贈られる梓会出版文化賞の特別賞を受賞している。

1991年に出版した『納棺夫日記』（青木新門著）は、静かな感動を呼び、長く読み継がれ、版を重ね続けている。そして映画『おくりびと』の原作になったことは記憶に新しい。

書店で目に触れる機会が少ないが、地方出版社からも、多くの良質な本が出版されていることを心

に留めておきたいものだ。

剣岳はさまざまな「謎」と魅力を持った山だ。たとえばこれまでの文中に登場した「剣岳」「剣岳」「剣岳」の表記の違いに気づいてもらえただろうか。『日本山嶽志』には「剣嶽」として登場するし、「剣岳」の表記が一般的な時代もあった。また標高も2998メートル、3003メートル、2998メートル、2999メートルと何度も変更されている。本の世界から、そんな「謎」をたどってみるのもおもしろいかもしれない。

東西南北

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

戦時下に結成された「日本女子登山会」

長田義則

本年5月3日、長寿104歳の中村テル名誉会員が逝去した。

昭和2年の正月、女性として初めて冬季の富士山頂を極め、同6年に女性だけの山岳会・YWC A山岳会を作った。この年、満州事変が勃発し、日本の軍事行動が始まる。同12年に始まった日中戦争も泥沼化の長期戦となつて、同16年夏には日米関係も一触即発の緊迫した状況にあった。

会報『山』766（3月）号に、佐々木民秀氏の「戦前の『日本女子登山会』の記事がある。YWC A山岳会から10年後の昭和16年8月の頃は、慶應の『登高行14号』に、7月13日「突如として文部省の通

達に依る夏山中止の報が入った」の記録に、日常の緊急事態がわかる。

すでに昭和15年6月、「京浜山岳団体連合会」が設立、同16年1月に「日本山岳連盟」も、情報局情報官・井上司朗らの役人主導で結成され、井上はその役員にも名を連ねる。本会百年史の水野勉氏の「戦争と登山と」に詳しい。

会報110号にある「日本女子登山会」会報特輯号の受入記録も、ルーム図書室や国立国会図書館への照会に所蔵しないことがわかる。眠っている山の本の1冊、『北の山・南の山』（吉沢一郎著、昭和17年11月）に注目の内容を見る。「時局と登山」「山岳連盟の結成近し」「登山と行軍」「大衆登山と岳連」と昭和16年3月の記録に、「東京女子山岳会の結成に寄す」がある。吉沢の関わった活動の頃を要約すると、女子には一般にいろいろ制

約があり、岳連に入りたくない人たちの指導や訓練は、組織的にどうしたらよいか。当時、釜山にいた佐藤（中村）テル女史も、年末年初に2度上京して、吉沢らと相談した。3月12日に日本山岳会の事務所で、懇談会形式の会合を開く。女子側は黒田米子、近藤聰子、大木千枝子、橋本も、代、青木美代、戸村あい子、川森時子、今井喜美子の八氏（黒田初子は欠席）。男子側は女子側の希望により、冠松次郎、青木昇、小笠原勇八、吉沢一郎の四氏が出席（角田吉夫、尾崎喜八は欠席）。懇談の結果、女子もまた日本国民の一人であることを自覚し、職域奉公は勿論のこと、進んで高度国防国家建設の一翼を担う者として、これから結成する東京女子山岳会に入会して、実際の指導や訓練をするというのが概要である。この東京女子山岳会へのプロセスが、最終的に「日本女子登山会」の名称となつて結成されたものと考ええる。

翌17年の統制には、敵性語が追放となり、YWC A山岳会の名称は「女子鍊成山岳会」に、「山岳ノート」を著わしたハイキングペンクラブは「山岳文化報国会」と改

称せざるを得ない戦時下だった。

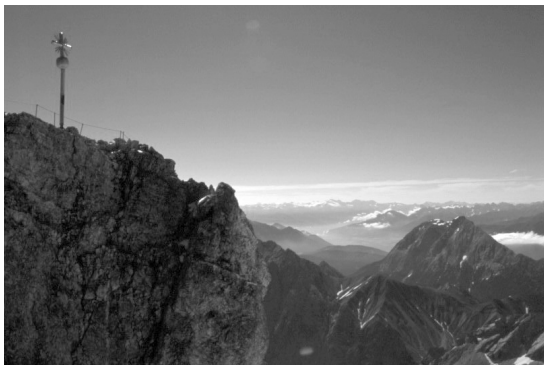
反戦を歌った与謝野晶子は、第一次世界大戦時に「女より智慧ありといふ男達この戦ひを歇めぬ賢こさ」と叫び、先々にも戦争から戦争への運命にあった昭和17年、惨憺たる敗戦を知ることもなく64年の生涯を閉じた。

ドイツアルプス紀行

中野守久

1週間ほどドイツに滞在していた7月のある土曜日のこと、ふと思いついてドイツ最高峰のスピッツェ山へ行くことにした。早朝、ホテルのダイニングが開く前にもぐり込み、今並べられたばかりの温かいクロワッサンと美味しいドイツコーヒーを急いですすり、ミューンヘン中央駅へと向かう。

13番線ホームには、すでにガルミッシュパルテンキルヒェン行きの普通電車が入っていた。日本と違いベルの鳴らない静かな発車である。フューネンブルクまでは複線、その先は単線である。私の乗った車輛では、ドイツ人の中年



十字架の立つ山頂を左にドロミテ方面をのぞむ

女性ハイカーたちが楽しそうに話をしている。

チュツィングを過ぎると電車は右に大きくカーブし加速した。どうも谷に降りているらしい。車窓は霧にすっかりつつまれてしまった。よく目を凝らすと、線路の両側では牛がのんびりと草を食んでいる。モーナウからは晴れ渡り、車窓右手には雪をのせた山の頂が見え始める。レージー川を渡る。川の水は氷河が解けた水で青いミルク色をしている。ガルミッシュ・パルテンキルヒェンに着くと早速登山鉄道に乗り換える。ジャーマンレイルパスを携行していたので、

割引を受けられたのはありがたかった。電車は夏のアルプの草原を抜けていく。ハンメルスバッハの駅前には、色とりどりの花に囲まれた滞在型のペンションが立ち並んでいる。そのうちにスピッツェル山がどんどん眼前に迫り、山腹のトンネル内に入ると、真夏にもかかわらず、車内はとてもひんやりとしてくる。

最後のピークへはロープウェイで行く。眼下の雪渓を見ると、雪山装備で固めた登山者たちが一列になって歩いていくのが見えた。頂上は無風快晴で素晴らしかった。360度アルプスが見渡せる。古くからあるヒュッテ前のテラスは、ビールジョッキ片手に美味しそうな料理をとりながら展望を楽しんでいる老若男女であふれている。今日ほどカメラを持ってきたことを嬉しく感じたことはなかった。たとえカメラがなくても、売店では格安でパノラマ写真を買っているの心配いらない。

頂上からはロープウェイで直接麓へ降りられる。オーストリア側に降りるロープウェイもあり、その降り口には山の歴史を振り返ることができる展示コーナーがある。

展示を見に行った私はそのままこのロープウェイの改札口へと進んでしまい、係員からパスポートを見せろと言われ困ってしまった。頂上から降りるロープウェイは急すぎる斜面を落下するようですリル満点だ。そしてまた、美しいアイブ湖を俯瞰するには絶好のポイントである。ロープウェイを降り、少し離れた登山電車の駅へ歩いていく。

ガルミッシュ・パルテンキルヒェンに戻ると、ちょうど昼ごろ。駅のキオスクには焼きたてのパンの美味しそうな匂いがたちこめていた。お腹のすいていた私はアップルパイを買って、帰りのミュンヘン中央駅行きの電車に乗り込んだ。慌しくはあったが、美しい夏のアルプスを堪能した「小さな旅」であった。

吹雪の山の湯で

熊谷とも子

終戦になるのを待ちかねて山へ飛び出しました。特に谷川岳へは毎週のように通っていました。

急に谷川岳に会いたくなってふらりと早春の谷川温泉に行ってみました。

荒れて狂うは吹雪か雪崩。俺達はそのようなもの恐れはせぬぞ——と誰もいない湯の中で山の歌を唄っていましたら、3日目に本当に吹雪になりました。

吹雪の露天風呂で、悲しかった友との別れ、苦しかった重いキスリングを担いでの縦走の想い出などを、走馬灯のようにひとり思いを巡らしておりましたら、ふと思いついたのです。

そうだ、山小屋を建てなくっちゃ。槍沢のあの小屋もなくなってしまうまま久しいし、岳沢の小屋だって早く建てなくっちゃ。

それで思いついたのです。

私たち、思いもよらず「お国からお小遣い」（定額給付金）がもらえるようです。それを一部でもいい、山岳会に……。半世紀以上も山を楽しませてもらいました。今も楽しんでます。ご恩返しをしましょうよ。もしかしてみんなの「お国からのお小遣い」がJACのポストに入っていたら……。500万円、1000万円、いえ、もっともっと集まるかもしれません。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

山研運営委員会

徳本峠越えと第63回ウエストン祭に参加して

6月6・7日、入会して初めての山行が、尊敬すべき宣教師・日本近代登山の父ウォルター・ウェストンのたどった道であったことは感慨深いことでした。山に登る者なら誰しも上高地、すなわち北アルプスに入る手段としての「徳本峠」を、一度は越えてみたいと思うのではないでしょうか。会報『山』に案内が掲載されて、すぐに申し込みました。

当日は島々宿に信濃支部の皆さんと一般参加の総勢150人余りが集まりました。6時10分、出発式を行ない、今にも雨が落ちてきそうな曇り空の林道をグループごとに歩き出します。二俣までは平坦な砂利道でウォーミングアップにちょうどよい距離でした。南沢

に入ると、いくつかの橋を渡り右岸左岸を行きかう楽しいコースとなり、あきることがありません。古い木道は苔と湿気で滑りやすく、ところどころ朽ちかけているものもあり油断はできないのですが、とても刺激的でした。休憩のたびに、山研のグループは気持ちが高まり、参加者の顔ぶれが判別できようになりました。

ニリンソウ、ヤマシヤクヤクなど可愛らしい花に勇気づけられながら、10時に岩魚留小屋に到着。ここから先は傾斜がきつくなりましたが、最後の急登つづら折りをなんとか登り切り、徳本峠小屋に13時7分到着しました。ガスがかかり、穂高は見えなかったのですが、徳本峠小屋があるだけで冷えた体が温まる気がしました。皆がそろったところで笑顔の記念撮影。明神へは所どころ雪渓が残る黒沢から白沢を下り、15時5分着。



今年は16人が峠を越えました

山岳研究所には、尾上会長もいらしてください、ここかしこ山の話で尽きることなく本当に楽しい夜でした。

翌日は穂高の峰がくっきりと見渡せる最高の天気です。初めてのウエストン祭では、青き空に響いた安曇野小学校の少年少女の清き歌声に目頭がじんと熱くなりしました。森委員の講演では緑の美しい地球を守るために、何十年も山小屋の皆さんが努力していることを見習い、私たちが日常気をつけていかなければいけない環境問題について学びました。

午餐会ではこの日の出会いに感謝し、また別れを惜しむように語り合いました。第63回ウエストン祭に参加できたことは実に有意義で、大切な思い出として心に刻みました。信濃支部の皆様と担当の柴山さん、スタッフの皆様にご感謝いたします。

（矢嶋真紀子）

科学委員会

探索山行——谷川岳の氷河地形と平標山の周氷河地形を観察

6月13・14日、谷川岳と平標山で探索山行が行なわれた。科学委員17名と会員20名、合計37名が参加した。13日は、谷川岳ロープウェイ駅の駐車場よりブナやミズナラの巨木に感動しながら緑滴る林道を行く。20分ほど歩くとマチガ沢の大岩壁が現われ、一同歓声をあげる。講師の小崎委員が氷河地形の特徴を解説、基本的な知識を頭に入れて一ノ倉沢に向かう。一ノ倉沢出合では、せり出した小尾根が実は巨大なモレーンであること、出合近くの巨岩が実は頂上付近の岩質と同じで、氷河が運んだものと推定できることなどを聞いて、これまで日本の氷河と言えば薬師岳や立山といった高山のカ-

ルだけを想像していた常識が一変した。

昼食後、氷河地形をより間近に見るため軽アイゼンをつけて烏帽子スラブの少し下まで登る。モレーンの上部に広がるU字谷を眺め、山頂近くから氷河によって運ばれたと推定できる大岩が、むき出しのモレーンの中に埋まっている地層などを観察しながら、数万年前にこの谷を埋めていた氷河の姿をまざまざと思い浮かべることができた。そのあと、幽ノ沢まで足を延ばし、谷をほとんど塞ぐ形で横たわる巨大モレーンを観察後、今晩宿泊する上牧温泉の老舗旅館辰巳館に向かう。

夕食前に小嶺委員、原田会員から氷河地形のおさらいと明日の観察地である平標山の周氷河地形（氷河周辺で凍結と融解、残雪作用などにより形成される地形）の解説講義を受けたあと、上質な湯と料理、酒を堪能した。

14日は雨で明けたが、まもなく薄日も差してきたので平標山に向けて出発する。登山者の車で混雑する元橋駐車場でバスを降り、山頂を目指す。途中、原田会員より偽高山帯の植生の特徴や、むき出



実際の氷河地形に立ち、講師の説明に耳をかたむける

しになった岩屑がザラザラに堆積する周氷河地形の特質の解説を受け、4時間ほどで全員頂上に到着した。頂上付近で凍結と融解、卓越風で形成されるパッチ状裸地やそこに定着するさまざまな高山植物も観察した。

小嶺・原田両氏の丁寧な講義と熱意溢れる解説のお陰で、参加者全員、にわか氷河地形学者になったような気分になり、大いに盛り上がった探索山行となった。

（平野裕也）

三水会

坂倉名誉会員追悼山行

5月30日、飯能駅に集結した24

名（JAC・エーデルワイスクラブ会員合同）はタクシーに分乗して竹寺に向かう。

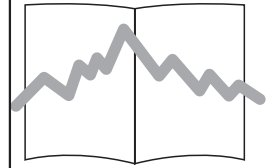
大野住職との挨拶もそこそこに裏山の鐘楼まで一気に登る。名鐘の音色を味わい故人の思い出とともに合掌。記念写真、スケッチなど憩いの後、豆口峠三角点まで往復健脚組と、稜線散策組に分かれ奥武蔵を味わった。ウグイス、ホトトギス、珍しくサンコウチョウの声まで迎えてくれたのには感激だった。そして、午後1時、竹寺瑠璃殿にしつらえられた精進料理の席についた。

三水会創立メンバーでもあった坂倉さんは発足間もない昭和52年2月、竹寺現地集会を提案された。大野住職と昵懇であった関係上、一般には開放しない宿坊の使用、真冬の竹料理のもてなし、厳冬の山行が実行され、三水会定例集会として29年も続けられた。料理にさきがけて塩沢さんが記録されていた往年の坂倉さん竹寺集会のDVD映像とともに大野住職の思い出話に追悼の言葉をいただき、故人が愛した竹のキャポ酒で献盃、竹づくしの山菜料理のコースに流暢な住職の料理法話が花を添える。

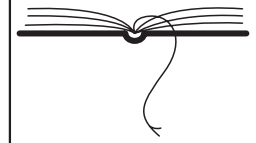
今回の行事を聞かれた静岡支部の長田会員はわざわざ坂倉さんに関する新聞記事のコレクションをコピーして全員に提供してくださった。さらに『岳人』『山と溪谷』の記事は塩沢さんのコピー、加えて坂倉さんが愛された歌の歌詞カードがまとめて全員に配られる。前に飾られている写真の微笑が増したような気がした。

竹料理を満喫した午後3時、全員で肩を組んで「坊がつる讃歌」「今日の日はさようなら」を合唱、追悼山行の最後を飾った。

（勝田房治）



図書紹介



雁部貞夫・著

『秘境ヒンドウ・クシユの山と人
パキスタン北西辺境を探る』



2009年5月出版
ナカニシヤ出版
菊判 412頁
定価 7140円

「一九六六年に始まる私のヒンドウ・クシユ通いも、すでに四十年を越えて半世紀近いものとなった。今日までおよそ夏の十五シーズンほどをこの山域で過ごして来た。パキスタン北西辺境のチトラールがその発足地である。平均すると三年に一度はチトラールのどこかを歩いていたことになる」

と「序にかえて」に記して始まる本書は「チトラール風物誌」「カフィリスタン探訪記」「氷河を越えて」の著者自身の紀行の章と「ヒ

マラヤの漂泊者」「レジナルド・F・シヨンバークの足跡」などのこの地方の探検史に登場する人々の軌跡をたどる章、あるいは「ヒンドウ・クシユの名峰」「ナンガ・パルバット登攀史」のヒマラヤ登山史にかかわる章などを含めて13の章から成り立っている。

手にしてけっして軽いとはいえない400ページを超す大冊だが、私は夢中になって読んだ。紀行の各章では表裏の見返しにある二葉の地図をコピーし傍らにおいて著者の足跡をトレースしていけば、氷河を抱く6、7000メートル級の高峰を仰ぎながら氷河をさかのぼり、雪の峠を越していく気分になった。若い頃から和歌を詠んできた著者の筆は、その土地土地の風物と人を語ってまことに細やかであり、「ああ、いいなあ」と嬉しくなってしまう箇所も多かった。

また、長年の訪問で親しくなっ

た王族の結婚式に招かれたり、あるいは異教徒には禁断の「女性たちの園」に入るのを許され写真を撮るなどとは雁部貞夫さんでなくて誰ができるか。その辺りは実に楽しい読み物になっている。

後半の、この地方の探検や登山の歴史などを語る幾つかの章を著者自身は「かなりの固めのテーマであり、文章になった」というが、そのような心配はないのではない

か。かつての深田久弥さんの『ヒマラヤの高峰』のよき読者であれば、そのテイリチ・ミール、イスト・オ・ナール、ナンガ・パルバットなどの項を補いかたがた興味深く読んでいけるだろう。そして文中に深田さんはもちろんのこと諏訪多栄蔵、フォスコ・マライーニ、吉沢一郎などの方々の名を見出した時には、思わず懐旧の念に頁を繰る手をとめる読者もいるだろう。

思うに、もし深田さん、諏訪多さん、それに望月達夫さん（早くからシヨンバークに注目していた）が本書を読むことができたならば、さぞ喜んだに違いなく、みなが「この本の紹介は私が書きたかった」といわれるのではないか。著者が詠んでは「深田久弥を恋うる心は

それぞれに今宵は掬まむ越のうま酒」。

『氷河小吟』抄の章は、現在「新アララギ」の編集委員であり選者を務める著者の短歌116首を載せて、「ブット首相歓迎会」「深田久弥への旅」の小見出しにまとめられたもののほかにチアンタール氷河やヤルフーン源流を旅する途上に詠んだ短歌などが多く集められている。

「パキスタン北西辺境——人と本」「英国王立地理学協会 ゴールド・メダリスト」の章は労作の一語。巻末に折込み「チアンタール山群パノラマ図」と人名、山・峠・氷河名の二種類の索引がつく。なお、本文頁の大半は上3分の2が文章で、下の余白には写真、地図、注記などが適宜添えられて理解を助けている。

諏訪多さんが描く山岳図や登山家などの肖像画が懐かしい。

品のよい上製本の造りで、装丁は小泉弘氏。カバーを飾る装画、本文中の挿画の幾つかは著者と何度か行をともししている輝子夫人の絵筆になる。

ほかに特装本（150部）もある。

（横山厚夫）

『忘れがたい山』

池田昭二・著



2009年2月
無明舎出版刊
四六版 220頁
定価 1575円

昭和30年代初期の東北の山々を中心とした回想的登山記録集である。「生きて帰ってきた! これでまた山に登れる!」という熱気にあふれた山行報告10編が収録されている。

物質的には豊かとはいえない時代、いたって粗末な食料(蕎麦粉など)を携え、炭俵のマットをスパツ代りにしムシロを巻き付けて(カバー写真、厳冬の山に挑んだという。

無鉄砲な登攀や縦走ぶりにはハラハラさせられるが、全編を通してのユーモアあふれた筆致に引き込まれる。なかでも「後立山縦走」(昭和27年8月)は、高校1年生ら6名を引率して涙と笑いの8日間を圧巻である。また「九死に一生の新婚旅行」(昭和37年11月)は吹雪の鳥海山中を5日間、遭難

寸前の彷徨をして帰宅、総費用は535円と、フィクションかと疑いたくなる破天荒ぶりだ。

巻末の「雪洞とフォーストビーク」は、豪雪山域での長年の体験に裏づけされたゆきとどいた論考でサバイバルのテキストとして有益だ。

著者は、酒田市の中学と高校で山岳部顧問を長く務め、70年ちかく鳥海山に登り続け、気象観測と積雪研究にうち込んできた。自然保護活動(スキー場開発阻止)をリードしてきた人でもあり、ヒマラヤやチベットへの遠征経験も豊富である。

中学生時代に登山入門した私自身の体験に照らして思うのだが、こうした熱心な顧問教諭が青春前期の若者に与えた影響と功罪(?)の大きさははかり知れない。現実には著者の育てた生徒の多くが、今でも山に登り続けているという。本書に掲載されている山行は今や古き良き時代の記録といえはそれまでだが、昨今の中学・高校のクラブ活動の場では、種々の事情や規制から思うように山に行けないのはまことに惜しいことだ。

(松澤節夫)

『わたしの山の博物誌』

水越武・著



2009年5月
新潮社刊
B5変型判 160頁
定価 3360円

すばらしい。内容も、本の造りも構成もまことにみごと。山を題材とした博物誌、あるいはそれに類似する本はたくさんあるが、これはひときわみごとである。

まずカバーがいい。白地に銀文字の書名が爽やかである。袖の折り返し独特で、2ページ見開きの冬の剣岳。黝い色調が幻想的だ。そして表紙と扉の黒の世界を開けて中に入ると一転、鮮やかな白い目次がまぶしい。

歳時記的な配慮から12章になっているが、1のライチョウから花、ニホンカモシカ、季節風、ハイマツ、天空、梅雨、ウスバキチョウ、氷河、ブナ、森林限界、そして12の雪とつづく。各章は2点から4点の見開き写真を頭において華麗な序曲を奏で、その後本文と解説的写真を配するという構

成。山の自然の風物を描く文や写真は、往々にして脆弱の気味をもつことがあるが、ここにある写真はどれも鋭くつよく精緻で、しかも抒情がある。文章も簡潔・的確、科学的雰囲気と著者自身の経験を織り込んだエッセイとなり、自然の気を十分に伝えている。写真も文も背筋がぴちっと立っている。

ほとんどの写真に撮影地点が書かれていないのもいい試み。場所が特定されないことによって対象のもつ純粋性が際立ってくる。

版元のつけた帯には、山の厳しさ、優しさ、美しさ、とあるが、それ以上にこの本で著者が描き出したのは、日本の山の持つ多様性であり、豊かさである。

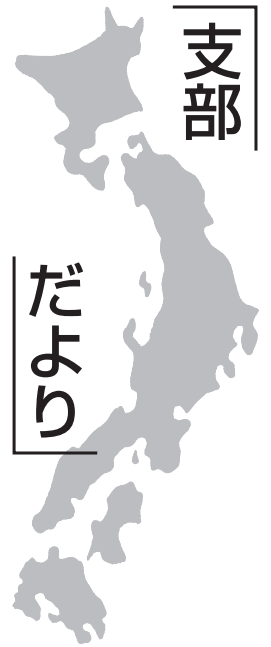
ところで、フランス語で帽子はシヤポー。それが「シヤポー!」となると、すごい、おみごと、感服、脱帽(シヤッポを脱ぐ)ということになるが、この本こそまさに、シヤポー!である。

扉・目次・各章見出しにさりげなくおかれた挿画がまた本の味わいを引き立てている。独自性と創造性をみごとに打ち立てた著作に対して、もう一度、シヤポー!

(大森久雄)

支部

だより



全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

秋田支部

春の支部山行「里山めぐり」

御嶽山、白山、斥候山

春の支部山行は、4月26日の予定であったが、天気予報で悪天候が予想されたので、28日に変更。

平日なので、現役の会員が参加できなかったが、12人の参加者で実施した。前日までの不安定な天候も打って変わって晴れ上がり、3台の車に分乗し、一路湯沢市へ。

まずは、地元の長岩名譽顧問の案内で、国道三九八号線上の立派なケヤキの大木を見ながら、湯沢北高裏手の御嶽山へ。国道端の登り口から、ほぼ山頂近くまで舗装された神社参道歩き。標高差200メートル程とはいえ、高齢の私には、急な坂道は足にずっしりと重みがのしかかる。しかし、左右の道端に生えるワラビやコシアブラ等の自然の恵みに気をとられながら登

る。最後は、杉木立に囲まれた20段の階段を上がり、御嶽神社と三等三角点のある頂上境内地着。眼下には湯沢市街が一望できる。

御嶽山下山後、松岡地区坊中にある白山へと向かう。松岡は、大正のころまで松岡銀山として栄えてきた地区で、鉱山で働く人々や白山参詣の人々で賑わいのあった地域だったといわれている。芽吹きが初々しい木立のなか、鳥居をくぐり、参道沿いにある経塚や灯籠礎石を見ながら歩く。

標高300メートル弱と低く、緩やかで歩きやすい歩道をゆく。分岐点に仏形の自然石があり、左は植林地となっている。右へ進むと小さな池があり、仁王堂があった。この先、北側の三角点のある山頂と、神社のある南側への分岐点にさしかかる。まずは三角点へ。

途中、葉師如来や子安観音などの幾つかの小さな祠を経て、刈り

払いされた歩道を歩き、三等三角点と金峰山大権現の祠のある山頂へ到着。カタクリの紫色の花が一面に咲いていた。

ここから分岐にもどり、白山姫神社へ向かう。登り始めて40分程で神社へ到着（ああ腹減ったあゝ、喉かわいたあゝ）。やつと全員で歓談しながら昼食にありついた（あゝうめごと、これだから山歩きこでえね）。真正面に、わずかに雪の残る東鳥海山を眺めながらの昼食は最高である。

下山後、長岩名譽顧問とお別れし、金沢にある斥候山へ向かう。



カタクリの花が一面に咲く白山頂上にて

この地名は、「後三年の役」当時の地名と思われる。登りわずか7分程で山頂。田の神や馬頭観音を祀る神社にお参りして、足慣らしの春山山行を終えたことに感謝。

また、帰路には、付録の羽後境・万松寺の境内にある樹齢400年の見事な枝垂れ桜（期間中はライトアップもするという）を観賞。

万松寺の入口に、思いもかけない水準点があった。私事、水準点なるものを見たのは初めてで、長生きはするもんだ、と思った。

（伊藤秀雄）



平成21年度臨時理事会

日時 平成21年5月28日 18時30分～20時

場所 日本山岳会会議室

【出席者】尾上会長、神崎・宮崎・藤本各副会長、成川・岡部各

常務理事、太田・堀井・相馬・山川・中山・谷川・永田・萩

原各理事、深川・平井各監事、酒井・近藤各常任評議員

【委任】野沢理事

【欠席】森常任評議員

尾上新会長から冒頭以下の挨拶があった。

前会長が強く求めた「執行部の若返りを図り、若返った力で困難を乗り越える」ための取り組みを強力に推進していきたい。当面の課題としては「3Pプラス1」つまり3つのプロジェクトと1つの課題に取り組んでいきたい。

1つは新法人制度への対応であ

る。その行方を決めるのも難しい課題ではあるが、それにもまして当局に具体的に申請をする前段階の実務作業がたくさんあるのではないかと考えられる。

2つ目は高齢化対策である。いかにして若年層を会員として取り込んでいくか。この問題は叫ばれて久しいが、遺憾ながら具体策がないまま今日まで推移している。もはや精神論・概念論ではなく、

具体的に事業計画・年度計画として立案を掲げ、行動に移し、推進していくことではないか。幸い今回若い方が理事に加わっていたにいて、若者とう向き合い会員として迎えたらよいかを真剣に考え、具体的行動を起こしていただきたい。

3つ目は支部の活性化である。日本山岳会の活動の原点は支部活動にあると考えている。首都圏の支部の組織化問題とこれらの方々

のパワーを地に着いた山の活動を通じて日本山岳会の活動活性化に繋げていくことを早急に検討し実施していく。

そして、プラス1は「山の日の制定」の問題への対応である。各支部に制定のための委員会などをつくっていただき、ある程度自由な発想で考えてもらい、これを全国的な運動に広げ、盛り上げていくことができればと考える。

これらの他まだいくつかの問題・課題があると思う。その1つはこの理事会効率化の問題である。十分な対話を通じて忌憚のない意見を聞きたい。そうすることを積み重ねていけばやがては会員の全体に浸透し、日本山岳会の活性化に繋がっていくものと確信をしている。皆さんと一丸になってこの難局を乗り越えようではありませんか。

【審議事項】

1・副会長の序列（宮崎）

副会長の序列を神崎、宮崎、藤本の順番とする。（承認）

2・常務理事の選任（宮崎）

互選の結果、成川、岡部を選任した。（承認）

3・事務委嘱（宮崎）

前常務理事吉永英明氏に日本山岳会本部所在の千代田区四番町5番4号の「サンビュウハイツ四番町」の管理組合の理事を向こう1年間委嘱すること、ならびに前記「サンビュウハイツ四番町」の102号室買い取りにかかわる交渉、売買契約及び所有権移転登記に関する業務を所有権移転登記完了までの間委嘱すること。（承認）

平成21年度第3回（6月度）理事会

日時 平成21年6月10日 18時30分～20時

場所 日本山岳会会議室

【出席者】尾上会長、神崎・宮崎・藤本各副会長、成川・岡部各

常務理事、太田・堀井・相馬・山川・野沢・谷川・永田・萩

原各理事、深川監事、酒井・近藤・森各常任評議員

【委任】中山理事、平井監事

【審議事項】

1・理事の委員会の相務（宮崎）

財務委員会Ⅱ岡部常務理事、相馬理事

●総務・インターネット小委員会Ⅱ宮崎副会長、永田理事

●山岳編集・会報編集・英文ジャーナル委員会⇨成川常務理事、萩原理事

●図書・図書管理委員会⇨岡部常務理事、中山理事

●学生部指導・青年部・指導委員会⇨相馬・野沢理事

●医療・科学・自然保護委員会⇨藤本副会長、堀井理事

●資料映像・海外委員会⇨神崎副会長、谷川理事

●山岳研究所運営・集会委員会⇨太田・山川理事 (承認)

2・海外登山基金審査委員の選任 (宮崎)

●委員長⇨宮崎絃一 (5751、留任、副会長)

●委員⇨小川武 (6305、留任)、池田常道 (7641、留任)、永田秀樹 (8020、新任)、相馬勉 (9362、新任、理事)、貫田宗男 (10106、留任)、松原尚之 (10507、新任)、谷川太郎 (11705、新任、理事)、古野淳 (12194、留任)

●事務局⇨萩原浩司 (13057、新任) (承認)

3・理事会の付託事項について (宮崎)

次の4項目については承認可否を常務理事会に付託し、承認事項について理事会に報告する。

①後援依頼・名義使用依頼

②JACロゴマークの使用許可

③図書の引用、貸出しの許可

④関係団体・支部等開催行事への派遣役員選 (承認)

4・インターネット規定の改定について (永田)

日進月歩のソフト・ハード面等の状況に鑑み現状に即し、かつ条文等を極力簡潔な表現に改め、弾力的に対応できる規定にした。

5・静岡支部長の交代報告 (宮崎) (承認)

前支部長、児平隆一 (9580) から、新支部長、久保田保雄 (6270) (承認)

6・JACロゴマーク使用許可願 (承認)

い (宮崎)
岩手支部から支部通信、封筒、チラシにJACロゴマーク使用したい旨の申請があった。 (承認)

7・JAC所蔵地図の利用 (誌面掲載) 願 (宮崎)

長岡正利会員 (10752、国土地理院客員研究員) から(社)日本測量協会の月刊『測量』7月号に、当会所蔵の『山岳』付図『日本北

アルプス一部臆測圖』(中村清太郎、明治44年) および『登山地図第1輯 剣岳』(日本山岳会編、大正4年発行) について利用願があった。 (承認)

8・「テンジン・ヌルブ絵画展」の後援依頼 (成川)

NPO法人 アース ワークス ソサエティ(理事長 大谷映芳) から、平成21年11月12日から12月20日の間札幌、群馬、東京、名古屋、大阪、九州で開催する「テンジン・ヌルブ絵画展」の名義後援依頼があった。 (承認)

9・山岳資料の写真撮影ならびに書籍掲載の許可願 (宮崎)

(株)山と溪谷社から当会発行『山岳』の通巻第146号、第149号および第152号に掲載の梅棹忠夫氏執筆の原稿を同社刊行予定の梅棹忠夫氏著『山をたのしむ』に掲載したい旨の願があった。 (承認)

【報告事項】

1・世界自然遺産地域入林者との域内保全に関する情報連携について (藤本)

林野庁から協力依頼があった。情報を共有し対応を検討していく。

2・同好会・同期会連絡会議の開催 (宮崎)

6月22日18時30分からJAC104会議室で開催する旨、各同好会・同期会の代表あてに案内をした。

3・新旧役員・評議員 懇親・慰労会について (宮崎)

6月24日18時30分からプラザ・エフにて開催する。

4・日中韓三国学生友好登山2009について (宮崎)

今年の幹事である中国側から日程の概要の連絡があった。開催は8月18日から27日までの予定。

5・第25回全国支部懇談会の案内 (宮崎)

福島支部主管で10月25日〜26日開催予定。

6・上高地山岳研究所に「AED」設置 (太田)

上高地地区山小屋で設置することになり、6月10日に設置した。

7・平成21年度山小屋等関係者打合せ会議の開催について (太田)

中信森林管理署から6月12日13時30分から同署会議室で行なう連絡があった。

8・平成21年度国立登山研修所事業計画について (宮崎)

国立登山研修所から事業計画の連絡があった。

9・平成21年度安全登山普及指導者中央研修会の開催について(宮崎)

国立登山研修所から開催要項の連絡があった。

10・(社) 日本山岳協会の役員改選(神崎)

今年度の役員改選の結果連絡があった。JACからは副会長に神崎副会長(新任)、常務理事(医科学担当)に堀井理事(新任)が就任した。

11・山岳3団体三役懇談会(宮崎)
(社)日本山岳協会から7月7日に開催する旨の案内があった。

12・平成21年度全国山岳遭難対策協議会開催要項(宮崎)

7月17日に開催の開催要項が送付されてきた。

13・平成21年度第1回評議員会開催(宮崎)

(財)自然公園財団から6月11日に開催する案内があった。

14・訃報(神崎)

祭禮衆名誉会員(4071、台北在住)が5月16日に逝去された(葬儀は6月20日に執り行なわれた)。

15 会報「山」6月号編集報告(成川)

ルーム日誌 6月

1日	総務委員会 アルパインスキークラブ
2日	図書委員会 海外委員会 アルパインスキークラブ
3日	常務理事会 集委員会 山岳地理クラブ
4日	アルパインフォトビデオクラブ
8日	アルパインスキークラブ
9日	資料映像委員会 アルパインスケッチクラブ
10日	理事会 休山会 山想倶楽部
11日	アルパインフォトクラブ 山の自然学研究会 みちのり山の会
12日	アルパインスキークラブ 九五会
15日	総務委員会 会報編集委員会 資料映像委員会 山岳地理クラブ
16日	自然保護委員会 山岳研究所 運営委員会 アルパインスキークラブ 00会
17日	三水会 つくも会
18日	科学委員会
20日	SUN燦会
22日	同好会・同期会連絡会議
23日	インターネット小委員会

千葉支部 アルパインフォトビデオクラブ ゆきわり会

24日 自然保護委員会 会報編集委員会 麗山会

25日 総務委員会 山遊会 01会

26日 アルパインフォトビデオクラブ

29日 財務委員会 システムプロジェクト

30日 指導委員会 学生部

6月来室者592名

会員異動(6月)

物故

蔡 禮榮 (4071) 09・5・16

熊野 将 (9971) 09・6・10

退会

村田安宏 (6560)

福島郁江 (11282) 東海

服部秀夫 (11386)

中村明治 (12055)

関根美千子 (13139) 静岡

信田邦子 (13174)

木内四郎 (13553)

神脇順吉 (14070)

佐藤 治 (14280) 京都

終身会員

作美 修 (6585)

西村一夫 (6708)

堀田哲男 (6740)



インフォメーション

◆「第25回全国支部懇談会」のお知らせ

福島支部

本年度は福島支部主管にて開催します。ぜひ、ご参加ください。

日時 10月25日(日)～26日(月)

会場 猪苗代町「ホテル リステル猪苗代」

日程

●25日Ⅱ記念講演(佐藤公「磐梯山の歴史」、懇親会

●26日Ⅱ記念行事(A・磐

梯山登山、B・猫魔ヶ岳登

山、C・観光)

費用

1万8000円(宿泊、懇親会費など)

定員

200名

申込

8月31日までに、支部ごと一括申込とする(個人での

申込者には詳細案内を送ります)。

申込先

八巻和男(☎960-8252 福島市御山字田中55-7

TEL & FAX 024-535-110 (59)

◆講演会のお知らせ 京都支部

日時 9月16日(水)18時30分

場所 京大会館102号室

演題 「芦生の自然誌、およびその環境保全の問題点」

講師 渡辺弘之(京都大学芦生研究林元林長)

*入場無料

問合 酒井展弘 FAX 075-922-2102

✉mt.sakai-hi-307@heraone.net.jp

◆初秋の剣岳に登る 集委員会

室堂から立山コースで剣沢小屋へ、翌日、剣岳山頂を目指す。

日時 9月5日(土)～7日(月)

集合 9月5日 午前9時

解散 9月7日 午前8時半

(いずれも室堂ターミナル)

費用 2万5000円(2泊3日)

定員 15名

申込 8月10日までに、成瀬ヒサ

FAX 045-933-6826

✉h-naruse@kifbiglobe.ne.jp

*申込者に詳細を送ります

◆自然観察山行のお知らせ

自然保護委員会

沼尻ロッジに宿泊し、磐梯朝日

国立公園の山に登ります。

日時 9月26日(土)～27日(日)

行程 26日・一切経山、27日・鉄山

集合 J R 福島駅西口9時(貸切

バスにて登山口へ)

解散 猪苗代駅 16時

費用 1万2000円(1泊3食、

送迎バス、保険料他)

申込 8月末日(定員にて締め切

り)までに、佐藤登代子

☎194-0044 町田市成瀬1-16-

4 TEL & FAX 042-1727-2682

✉tyksato@com.home.ne.jp

*申込者に詳細を送ります

◆小泉武栄氏の巡検参加者募集

山のお中道(御庭・大沢崩れ付近)

山で自然観察会を行ないます。

日時 10月3日(土)日帰り

定員 25人(往復チャーターバス

利用)

費用 約6000円(バス代含む)

集合・解散 J R 国立駅

図書受入報告 (2009年6月)

著者	書名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
川本明	若き日の想い出——家族と山の仲間達へ、そしてまた...	63p/16×20cm	本つくり舎	2009	著者寄贈
山下順子	風の花 青いケシ紀行	229p/19cm	西田書店	2009	著者寄贈
岩村史子・篠浦千史	サンガイ ジウナコ ラギ——みんなで生きるために	28p/21cm	日本キリスト教団出版局	2008	小泉弘氏寄贈
新妻香織	よみがえれフー太郎の森——エチオピアで希望を植えよう	175p/21cm	東京新聞出版局	2009	出版社寄贈
樋口一郎	ニッポンの山「解体新書」	271p/21cm	東京新聞出版局	2009	出版社寄贈
海津正彦(訳)	アンデスの奇蹟——生還者みづから語る72日間の真実	405p/20cm	山と溪谷社	2009	出版社寄贈
梅棹忠夫	山をたのしむ	364p/20cm	山と溪谷社	2009	出版社寄贈
山と溪谷社(編)	もうひとつの剣岳 点の記	189p/21cm	山と溪谷社	2009	出版社寄贈
中村昌洋(編)	剣岳 点の記——オフィシャルガイドブック	92p/26cm	扶桑社	2009	出版社寄贈
田村俊介(訳)	タイガを通して——極東シホテ・アリニ山脈横断記(東洋文庫)	244p/18cm	平凡社	2009	出版社寄贈
中山有(編)	故・有村哲史さんを偲ぶ	71p/30cm	千葉高校山岳部OB会有志	2009	編者寄贈
高橋千鶴破	名山の民俗史	348p/20cm	河出書房新社	2009	出版社寄贈
奥武蔵研究会(編)	美しき奥武蔵——関口洋介写真集	48p/21cm	奥武蔵研究会	2009	発行者寄贈
Clinch, Elizabeth & Nicholas	Through a Land of Extremes——The Littledales of Central Asia	324p/25cm	Sutton Publishing	2008	購入
Sood, Maj.Gen.(Retd.)/Shubhi	Younghusband——Troubled Campaign	212p/22×29cm	India Research Press	2005	購入

立山カルデラ砂防博物館

富山県中新川郡立山町芦峯寺字ブナ坂68
TEL 076-481-1160 FAX 076-482-9100

——山と川と人のミュージアム——



入館料 一般(個人)400円、団体(20名以上)320円、大学生(個人)320円、団体(20名以上)200円
☆高校生以下の場合は無料
開館時間 9:30~17:00(入館は16:30まで)
※ゴールデンウィーク期間、夏休み期間は8:30開館
休館日 毎週月曜日、祝日の翌日
※ゴールデンウィーク期間、夏休み期間は休まず開館
交通機関 電車利用の場合：富山地方鉄道立山駅より徒歩1分、車：北陸自動車道「立山インター」から約40分

立山カルデラは、立山連峰・弥陀ヶ原の南側に位置する大きな窪地で、火山活動と侵食作用で形成された独特の自然をもつ日本有数の大崩壊地であり、立山の自然史を解くために重要な地域である。また、立山カルデラには多量の崩壊土砂が堆積し、下流の富山平野に土砂災害をもたらしてきたため、100余年にわたり大規模な砂防事業が続けられている地域でもある。当館では、立山カルデラを中心とした立山の自然や歴史、立山カルデラで行なわれている砂防をテーマとして博物館活動を行なっている。

室内展示には、立山カルデラ展示室とSABO展示室、大型映像ホールがある。320インチの立体ハイビジョン映像や立山カルデラの大型地形ジオラマ、崩れやすい立山カルデラの地質展示、鳶崩れの様子をアニメーションで紹介した安政の大災害シアター、立山砂防について詳しく紹介したトロッコ実車展示、自然災害の映像を集めたくらしを襲う土砂災害等のコーナーがあり、館のテーマについてわかりやすく紹介している。

また、立山カルデラや立山、常願寺川流域を野外ゾーンと位置づけ、現地を直接訪れる「立山カルデラ砂防体験学習会」や「フィールドウォッチング」を年間数十回実施していて、実際に見て、感じ、体験できることから好評を得ている。

さらに、年間数回、立山カルデラや立山の自然や歴史、砂防をテーマとした企画展や特別展を実施し、来館者の皆さんに、立山のさまざまな姿について紹介して理解を深めていただいている。また、立山の自然・歴史についての継続的な調査研究活動を実施していて、その成果は、展示や教育普及等の博物館活動に活用するように努めている。

申込 8月末までに、櫛田 勁

FAX 045-962-3786

✉ ke35@gf.co-net.ne.jp

◆土曜会よりお知らせ

土曜会

土曜放談会を開催いたします。

どなたでも参加できます。

日時 8月29日(土)15時~17時

場所 日本山岳会集会所

会費 1000円(酒肴あり)

問合 箕岡三穂 FAX 042-7776

11788

✉ kite1937@theia.ocn.ne.jp

◆川喜田二郎氏の「お別れ会」

川喜田二郎名誉会員が7月8日、

老衰により逝去されました。「お別れ会」のかたちで無宗教による告別式が行なわれます。

日時 7月25日(土)14時

場所 両国・西光寺(東京都墨田区千歳2-4-7)

TEL 03-3633-3542

問合 熊谷義信 TEL 045-3735675

3633-3542

3633-3542

問合 熊谷義信 TEL 045-3735675

35675

■訂正とお詫び

6月(769)号、12ページ1

行、12月(764)号は(763)

号の誤りでした。訂正してお詫び

します。

◆編集後記◆

●今年の冬、杉本さんから1通の手紙をもらいました。明治後期以降の山岳写真537点を安曇野市へ寄贈したという内容でした。公開に合わせてその経緯を巻頭で綴ってもらいました。

●観覧者が140万人を突破したとのこと、映画『剣岳 点の記』が好調です。合わせて書籍も何冊か刊行されました。私が編集した本もあり、想いもひとしおです。図書委員長の三好さんに紹介してもらいました。

●イギリスの登山家、サー・クリス・ボニントンが来日しました。1970年代、世界の登山界を牽引した重鎮です。指向の異なる若い女性2人との講演会で、若いハイクーから往年のクライマーまで多彩な来場者があり、なにか不思議な催しでした。(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 770号

2009年(平成21年)7月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 尾上 昇
編集人 神長幹雄
Eメール jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社